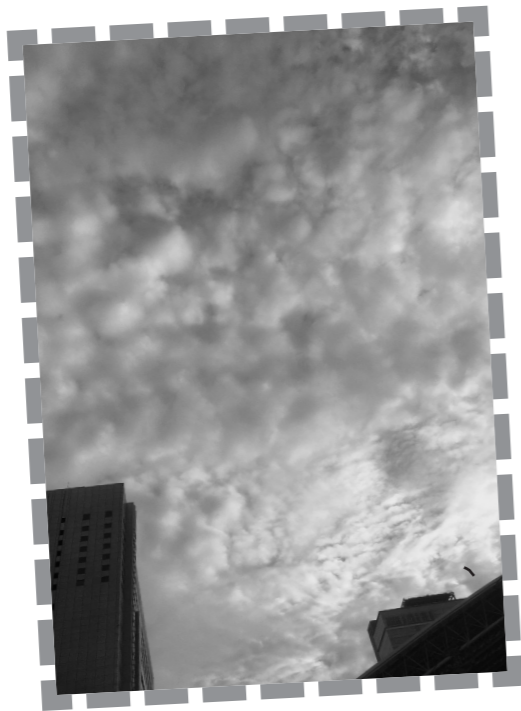

月 刊

MéLange

Vol.114



2016.06.26

詩と評論

月刊「MéLange」

Vol.113 2016.06.26

「月刊めらんど」編集部

追悼・寺岡良信〈トゥオネラ忌〉

I miss (信) 寺岡さんへ (俳句) ……………岩脇リーベル豊美 04
 寺岡良信氏を偲んで、追善三句 (俳句) ……………野口 裕 05
 白拝の記 (俳句) ……………大橋愛由等 05
 玉じゃり ……………月村 香 06
 寺岡良信の不良の唄 ……………大西隆志 06
 迷惑な話 ……………福田知子 07

詩 & 俳句

海外詠 (俳句) ……………岩脇リーベル豊美 03
 「孤児」のしつけ ……………高谷和幸 10
 ぬぐい ……………大橋愛由等 11
 空席／ぎよろ目 ……………中嶋康雄 12
 最短のプレス最強のプレス・アテンポ……………月村 香 13
 耳・路…………… 富 哲世 14
 バナナ病 ……………黒田ナオ 15

連載エッセイ & 詩評

ひと言詩評〈16〉詩集「詩に就いて」谷川俊太郎～隣人なき詩人……………富 哲世 8
 神戸詞あしび 103「海を見ていた午後 神戸を見わたして」……………大橋愛由等 16

編集部だより★34／もう一年が過ぎたのですね。詩友・寺岡良信氏が永い闘病生活をへて旅立っていったのが、去年6月のことでした。多くの詩友たちにその人柄と作品が愛されていたことを実感しました。そこで今号(114号)では、寺岡氏の命日である6月27日を「トゥオネラ忌」と命名して、寺岡氏を偲ぶ特集を組みました。「トゥオネラ」とはフィンランドの作曲家・シベリウスがつくった「トゥオネラの白鳥」という曲が有名で、原義は地名であり、「冥府」という意味でもあるようです。クラシック音楽をこよなく愛し、詩作品の中にも「トゥオネラ」を詠み込んだ寺岡氏にふさわしい忌日名だと詩友たちによって決められました。／114回目の読書会は、富哲世氏が担当。谷川俊太郎の詩集『詩に於いて』(思潮社)を取り上げます。今年に入っても何度かの手術を経ながらも、詩に対する情熱は深く、ここにも自らの生のありようと詩人としての生とまっつきにおいて合致する表現者がいることを畏敬のまなざしをもってみつめるのです。(大橋記)

◆海外詠

岩脇リーベル豊美

静謐という語を遣う女子ありし初夏
 難民の赤見いないいないバアで泣き止む奇蹟
 土筆は有毒とする幼児期や悲しき里
 三人寝ママのみ眠れぬ巴里テロ予告の月夜
 新聞記事切る指窓に映る雛罌粟の列車
 ノマドによる句脈思い出し絶望するか老犀
 五月雨にうな垂れし薔薇近代自我の煉瓦塀
 同僚のキスの夢醒め丘陵迷走し
 きみは蝶なのヤスミンの繁みから飛ぶ敵兵

追悼
寺岡良信
トゥオネラ忌
作品集



われらが詩友・寺岡良信氏が亡くなって一年がたちました(命日は2015年6月27日)。そこで生前氏と親しく接していた詩友たちが集い、命日を「トゥオネラ忌」と名付け、寺岡氏の詩業をみつめつけようと思い、有志による追悼作品を掲載することといたします。(写真は長田高校生だった頃の寺岡氏)

◆ I miss (信) 寺岡さんへ

岩脇リーベル豊美

手折る枝に西脇順三郎がレクイエム
芍薬の凍湖のような血の滲み
ローレライ僕を死なせて夜雨の詩
受肉の器イノダの珈琲で満たしたり
懐かしき珈琲の波立つ街を案内
ディオニユロス受肉の器を供えけり
愛おしき楽器を九指が遊ぶ宵
ふたご座の寺岡良信の俳句揺れ
敬称が野生動物の習性似合わぬ春
菩提樹と名付けらる児が巣立つ文月

◆ 寺岡良信氏を偲んで、追善三句

野口裕

溺れ谷から届いた声は朴の花
放ちたる歌まぎれなシクレマチス
齒が欠けてこぼすパエリア梅雨長し

◆ 白拝の記

大橋愛由等

傘ささず詩を抱きし朋ありき
生ひて去り偲びてくらす雨の季なり
亀裂あり白桔梗なくばたちくらまん

◆玉じやり

月村香

まだみんなが誇りを持って生きていた頃みんなが食事の支度を中心として生きていた頃わたしたち夫婦が子にかかりつきりだつた頃ふりまわされ必死で戦ってきたその時が今薄く消えてゆくうとして一葉の写真がわたしの肉体の衰えとともにわたしに次のように告げる今さらながらの革命ですなかびを磨きなさいあかを落とさなさい玄関を掃きなさいそして歩き疲れ入浴しなさいあなたはその一葉の写真で人生すべてが見えたでしょう幸福というのは一歩ずつふみしめるたびに音をたてる玉じやりのことです

◆寺岡良信の不良の唄

大西隆志

街中で船の曳航を見いだし船員が夜な夜な集うバーで黙って噂話に聞き入るのだ頭がぼこぼこ浮かんている田圃の中を歩いてきたのに怒りと船は似合っているか骨笛はジャケツトで彫琢よ音符で悲哀を感わすのだよへなへなふうふうべろべろ旅の途中なんだよ脚を見な星董を舐めるなよ腕を組みコオベストラの電柱が揺れ電線は撓みはじめたんだよ月夜に歩くのは銀の骸骨と足の生えた電柱とクレールン密談を終えた無政府主義者

坂を登り降りしているのはダンスと箆笥の交流の日常スパークするのは獄死した霊たちのメッセージ火花か路面電車はベルを鳴らして潮のにおいは山から漂って山から駆け降りる海彦の禪はいほうのめんぼうのややアタリメをツマミに海軍は女郎買いの深夜に詰め将棋高知の坂本と新宮の大石や福井の森近は貧乏線を引く岡山の秋水さんは時を削る地名にもたれながら盤面が凶器の指し手にいちやもん何を教えているのかしらん街のビルの窓硝子は夕陽に軋んでいるのかきなくさく頭の詰め物にノスタルジーあの子この子も遊戯が上手寺岡良信さんのいない六月当たり前ですかベッド脇の椅子の上に沸騰した薬缶が落ちて沈んで港から出航だ

◆迷惑な話

福田知子

赤いロゴタイプの大学院で赤いシャツのT氏に出会う実はボクも詩を書いているので死を生きているのですあと二年のいのちなんですだからいっしょに詩を学びましょう——迷惑な話、それって押しつけ入学して最初にであった目眩

行きつけのクラシック喫茶は校門前の大きな樹のそばにあるゆっくりと来てくれたらいいいつまでも待っているから——迷惑な話、帰りたいのに

学生も教員もほとんど来ないカウンターだけの近くのおでん居酒屋にマイ箸をキープしている店主は変わった人で毎日二時間もかけて自転車を通ってくるらしいその店にあなたと行きたいのですえっ?!それからカラオケも付き合ってくれたらうれしいなあ——迷惑な話です

数日後赤いTシャツを着て教室に並んでいたら

Tさん、詩もいけれど修士論文の渡邊直己をまとめて本にしてくださいよ教授はわざわざ横にきてそんなセリフを捨てていく詩の同人誌を広げる私を胡散臭そうに一瞥しながら——もう、まったく迷惑な話

Fさん、きょうは図書館を案内しますひとりで行けるわ、図書館くらい——きわめつけの迷惑!あ、違うんです

院生は裏の書庫に入れるんですたしかにそれはちよつと不安リファレンスカウンターの向こう側には青黒い空間が広がっているようでもちよつとコワイ入室はまず持ち物をロッカーにしまえますペンケースと学生証と貴重品だけのさむぎむとしたカッコで出向く院生の戦場鉄が剥きだしの重い扉

そこを開けると死刑台に続くような暗い階段があるエレベーターはやたら広くて頑丈で凄まじい音がする文学関連専門書は三階の900番台書棚から書棚への薄暗い書庫は迷路そのもの黴臭いにおいに咳き込む古事記のレポート資料には西郷信綱の注釈本中世文学なら風景景次郎もいいそれから我々は詩の研究者だから西郷の『詩の発生』これはいいですねえ

副題は——文学における原始・古代の意味——はあ、なるほど現代詩しか興味なかったけどこれってすごい何だか迷惑でなくなりはじめ……

Fさん、よろこんでくれたようでうれしいです明日は文学部地下の書庫を案内しましょう!

詩集「詩に就いて」 谷川俊太郎「隣人なき詩人

：意識とは、その存在がそれとは別の一つの存在を巻きぞえにするかぎりにおいて、それにとつてはその存在においてその存在が問題であるようなひとつの存在である、と。

いうまでもないが、この巻きぞえにされる存在は、諸現象の超現象的存在にほかならないのであって、諸現象の背後に隠れているような一つの本体的存在ではない。意識によつて巻きぞえにされるのは、このテーブルの存在であり、このシガレットケースの存在であり、そのランプの存在であり、いつそう一般的なには世界の存在である。

（「存在と無」 緒論VIより）

ここでの超現象的存在とは誤解を恐れずに言えば、おそらく意識がノエマとして巻き込む現象の外部に無言の合図のように指定される即自的存在の謂であり、これは一方で現存在の頽落へと現象のベクトルを伸ばすというばかりでなく、この部分をこの詩集での様々な詩作に当てはめてみると、その詩の手つきも（われわれの詩作行為の多くもそうであると思わせられるような）サルトル的現

象学の意味の脈絡のうちであるように思われるが、さいごの「世界の存在」というところを、「宇宙」とでも広げてみれば、そこには谷川の形相からの質量へのはみ出しの哲学が見てとれるのではないだろうか。

たとえそこに個としての自己や他に対しての忸怩たる思いや苦い認識が含まれているにせよ、谷川の詩行為には詩とことばの蜜月を感じる。謂わゆる「円相」のような小気味よくかつ達観的な完結の円熟を感じる。詩のことばはその悶えのなかでさえ、世の不完全さと宇宙の「非情な完全」との一体によつて世界の深度と、組合せの意思にある自由の余地を描きだそうとする。「詩は常に無言で存在している」と言う谷川にとつて、おそらく「詩」（ポエジ）とは要素であり元素であるような宇宙のエレメントのひとつである。詩と宇宙のエレメントとしての一致が、普遍性の原理を生み、それが同一性の否定としてのことばの「匿名性」を保証する。

「世界は素晴らしい」と思つて巣立つてきた者が、詩人となつてその気持ちのまま、世界の肯定感情のなかで人なものとながりたいとことばを作ろうとしてきたこと、そこには多分逆手にとつた「世間知らず」の意味の真つ当さと、巧みならずしが生じる理由がある。「アウシュビッツ以後詩を書くことは 野蛮である」（アドルノ）とも言わ

れたいま、その純真の無垢に促されて「ワンダフルワールド！」と心底から喜ぼうとする者はその恩恵に浴するかわりにある盲目を自分に課することになるのではないか。しかしそれは、詩のことがつなかりたいと欲している（彼ら）という〈世界〉そのものの性質であるところのものを取りなく善に向かつて押し上げていったところに成立するものなのだ。その飽くなき肯定感に立つて世界を批評しつづけることこそが、現在までも谷川俊太郎という詩人の魅力であり、希少価値なのではあるまいか。そしてまたしかし、そこにこそ、詩意識に現れた関係性の抜け穴というものもあるのではないだろうか。

谷川俊太郎の詩の質は、第三者と共有できる限りにおける「美」なのだ。谷川にとつての「あなた」とは、二人称ではなく任意のあなたという匿名的な三人称を意味する。あなたを通して不特定な第三者を見、私性の器が他性という世界性と融即するとき、わたしという一人称の自由と彼（彼ら）という三人称が美において一致する倫理の占有、それがありうべき詩にとつての善的正義なのである。その詩の確実な着地所、それらは第三者、「あなた」としてのわれわれ読者がそこに否応なしに巻き込まれようとする時空の無限の延長としての（謂わば宇宙的な善意の倫理に世界性として孕まれているだろう）第三者の客観的視野から見て、それはもうすでに文句のつけようのない出来栄となる他ない（私||彼ら）として現れている。そこにある谷川の理性とは、わたしと彼らとの間で成り立っているはずの謂わゆるカントの普遍的立法である。

（君の意思の格率がいつでも同時に普遍的立法として妥当

するように行為せよ）。谷川の谷川たる理性的な態度も、そんなカント的な批判精神から来しているのではないだろうか。

ある宇宙的なエレメントに属しているもの（ポエジー）を、私有として事物化し、それを他者へと供与すること。この私有↓供与の関係が詩の普遍性を成り立たせているのだが、谷川にあつてはことばの匿名性を成り立たせるその（胚胎・前私有↓私有↓供与の関係に「善」や「正義」へ向けての道德律が予定調和的に介在している）。

この詩集のなかにもふとそれでも、隣人としての顔が覗いてくるものがある。「小景」や「二人」などであるが、その登場人物は「わたし」と「あなた」ではない「男」と「女」である。この客観描写風な距離の置き方のうちにも、この倫理的な詩人にとつて隣人という存在がストレッサーである様相をうかがい知ることが出来、またかつて名詩「さようなら」の〈母〉―〈ぼく〉がそうであったように、一対一の間近きにある深淵がより私的歴史のレベルで挿話的に覗かれている気がする。ここでは「詩に就いて」というテーマが人の間近さに場所を譲つて、なにか色褪せて後退しているときえ見えるけれども、ことばをめぐつて、詩と詩人との間で重心を巧みに移動させながら、それらはいずれにしても「詩に就いて」のことだとする今の態度なのだろう、これは詩の私有をめぐる理想と開き直りの滋味に富んだ詩集である。

（2015年4月 思潮社刊）

◆「孤児」のしつけ

ステファンヌ・マラルメの『追憶』をめぐり

高谷和幸

私は孤児。黒頭巾をかぶり、目だけで家族を虚ろにさがした。五角形の北の方位をめぐる大地のオーロラが上がると、そこには未だありえぬもの、または未来の自分はこうであると感じていたのだろうか、私は放浪する人たちのおいを好み、その人たちの話題になるのを好んだ。裂けた時間、山間部の広場にある水飲み場からあがる歓喜の声の予ら。遊戯には「おくりびと」の使うカミソリの時刻を必要とするのだが、私は、親子の中でミッキーの帽子をかぶったきわめて脆弱な体躯をした一人の子に話しかけたいと思った。私は何昼夜もそこでどまっていたように思う。

やわらかい草の小道をひく（ひいて）

見えない御者にひかれ

くわえて「孤児」と、それは名指し（ひして）

黄花にひいておいたことのある

糸すじのその「それという音」

の漆喰の落ちた建物を見た

※指示子＝shifter

「孤児」のある方法、液体法ではなくなること。

同時に六月の乾いた窓の下になる。それ。のそれ。

まあたらしい

葉脈に添って

たくさんの「孤児」が生まれる

吐き出す糸の「そこ、ここ。」にまぎれて

とげの中に私は隠れた

生じたこともなく、存在しなくなることもない純粋な言葉を包んで

※夕暮れ、窓ガラスの外側を何人もの姉（Sister）が丘に向かつてゆつくりと登っているのが見えた。私の育った最下級の学級で、「このもの（指示子）」は実際には「このものではない」という言葉の死ぬところがあると教わったような記憶がある。

舞い降りたばかりの鳥が
私の足音に驚いて、振り返った
その鳥の眼の中にしか存在しない
「孤児」という送付

青い息は

石に暗闇をつくり

「孤児」はその位置の「言葉の死ぬ家」に繭をつくる

溶解した電気のハーモニカが

5拍子と4拍子の

肥大したベースに苦しく口を開けている

私は腹を空かしていた

※言葉の親密圏は、「身体は」。つまりマチスの絵の狂人の尻を顔につけかえたそれ。繰り返して、「つまりマチスの絵の狂人の尻を……である。」みみずくに似ているが似て非なるもの、「みみずくに似ているが似て非なるもの。」目のように見えるが何も見えない目を持ち。「のように見えるが何も見えない目」。複数の手足の動き。連動する親密な動き。「そこには《そこの生まれるところ》」私は記憶のどこにも父と母がない、と気づく。「孤児」という名さし（なをひく）の「孤児のひく、白い糸」のまうしろにあるもの。が、硬化して、脱皮を促されているようだ。「父と母を殺した年老いた大道芸人」がベンチの上をゆつくりと歩いていった。周りに観客は誰もいない。あの時も、彼の背中を見ていたのは私だけだった。

親指と中指のあいだで

つかもうとする

それは息とも思われ

山という

空の 川の 道の

テントにはテントのそれ

そこというものにある波動（どこに伝わるのだろうか）

それとも思われるものから

姿をあらわせ、と呼ばれ

と呼ばれたような波動につかまれ

「孤児」は

人の間に意識の紐でつるさされている

おーい

おーい

おーい

◆ぬぐい

大橋愛由等

不機嫌な鉄にはたずねずらい

（丘の上から矩形の海が見えている。ずっと海を見ていたのか、あの日もかの日も。寡黙だったわけでもないのに、石の語りにも耳そばだてていたわけでもないのに、花は手向けられていた。積まれた石たちは知っているのだろうか、森閑とした山道でもらした吐息の色を確かめたわけでもないのに、三角形はその自同律を美しく保ったまま老いようとしていて、書き込みが稠密な詩集を巨樹の根元に置いてみようと思いたった梅雨の晴れ間のある木曜日、生まれてこなかった小風の数をいくらかぞえたってロマンセは翻訳できないよとなんどいさめたって、かなしみの曲はモード奏法なんだと言ひ張るものだから、ぼくは必然さ」と竹ペンでなぞろうと夕刻を生きていたら、食卓の上には赤いピエントのおしゃべりが過ぎるときに処方すべき胃薬が置いてあることと、二人で過ごしているときのくさめはラの音をすこし外すんだよということ、をきみにささやこうとしているんだ。

◆ 空席

中嶋 康雄

空席だという
なにかがすわっている気がする
いや、空席だ、という
別の席はご用意できません
立ち竦む
邪魔だからはやくすわってしまえ
と怒られる
なにかがもうすわっている
重ねてすわると嘔みつかれる
尻が腫れあがる
跳びあがって立つと
なにを考えてるんだ
邪魔だ
はやくすわれ
血のおいがする
出た血はさつさと吸う
それがエチケットだという
隣の席も空席だという
新しい人が隣に座ると
古い隣と
もつと古い隣たちが
新しい尻を嘔んでいる
血を吸われはじめると
また空席だという

いつ終わるのかと
思っただけで
係員がとんでくる
注射をうたれる
うたれた腕が枯れる
隣にあたる
ポキリと折れ落ちる
隣が層ごと
苛々する
はやく食べてしまいなさい
ポリポリと
折れ落ちた腕を食べはじめると
これも空席になる
のどが
かわく

◆ ぎよろ目

中嶋 康雄

ぎよろ目に睨まれる
真夜中に自転車は放置されている
風もないのに揺れている
月が蜘蛛の巣にひっかかっている
桜が咲いている
酔っぱらいが桜の枝を折って
大声を上げて振りまわしている

終電車が行ってしまった駅のホームに
蜘蛛の巣が張られる
明かりに誘われた酔っぱらいが
巣にひっかかってもがいている
呼吸装置が切られ
暗闇が訪れる
酔っぱらいが萎れた枝を握ったまま
朝のぼろぼろの蜘蛛の巣に
まだひっかかかって揺れている
血はほとんど吸われている

台風接近の暴風が
酔っぱらいにお臭い体を収監する
たらい回しにされる
制度がそれを推奨する
たらい回しにされていると
自分がどこにいて
自分が誰だか
まだら模様にならなくなる
空が黒い雨雲におおわれている
こんなに黒い雲は見たことがない
遠い過去だけがよみがえる
もう
よみがらなくていい
かなしいだけだから
黒い蜘蛛がひそみ寄る
大声をあげる
ぎよろ目にまた睨まれる

◆ 最短のブレス最強のブレス・アテンポ

月村 香

とうとう見てしまったねわたしの自由をわたしの
快樂をおながが満たされれば何でもよいという激
しい自己認識が何人もの人生にかかわるとき人は
地獄を見るそういわたしもまたわたしであつて
さつきまで昼食を食べておいしいともまずいとも
表現せず(つまり意味のないこと)あたりまえに(胃
だけをパカッとあけて放り込んだだけのホワイト
ソーダいわゆる酒のごとき)ぶれてゆく自分いやだ
なああつそうもうわたしはおいしいと感じな
い水道水を口につっこむだけ損な午後二時の欲望

◆耳・路

富哲世

だから讚えるものは思い出とともにもう鎮まりたがっている
ブナはその森の気絶の信号なのか
朝から小鳥はさざめくし
葉叢はさわぐ
建て付けのはしらはぎいぎい歪んではほお擦りし
水に応えるやうに囁ずりに呼応する
ホトトギスの夜の深みを追い払うかのように
木戸を開いておいでおいでとだれかが短く敷物をたたき
霧が晴れてはまた流れはじめ冷えが肩を濡らし
鶏舎ではもう夏のうたげが浅いゆめの翼を閉じようとしている
砂上の順序に追いたてられて
野菜をしるすしずかな疾駆のなかに閉じ込める
空き箱が鳴いている

潤いのかたわらの
共鳴をもとめて
網のなかで奔めく目たちがさいごの朝日に見惚れるように開い
ていたとき
きよう公園駅で
贖罪の器がきれいに取り払われて
何事もない乗り場の風景が少しだけずれて見えたとき
やがて山海の緑を浴びて戻ってくる立ち尽くすあなたの横で
石つぶてをかかるとにふみながら
血のイバラを頭に置いた裸の男が木を背負いひとつの汗にむす
ばれて
見えない丘への階段を登っている
としても
すぎ間のないこの許しは
いま
どのくぼみにどのポスターの陰に
どの木肌にとの下道に
鬱血しようとしているのか

◆バナナ病

黒田ナオ

食べても食べても
バナナを食べる
ぼとりぼとりと
落ちてくる
澄みきった
青い空から落ちてくる
何本 何本 何十本
黄色いバナナが落ちてくる
私は待つ
両腕を大きくひろげ
ひとりぼっちで
なーんにもしないで

酸っぱい私の胃袋の中は
甘くて黄色い匂いで満ちる
甘い匂いが口じゅうにひろがる
甘い匂いが体じゅうにひろがる
それからそれから
空いっばいにひろがつて
ぼとりぼとりと
私が落ちる
空っぽの
青い空から落ちてくる
何人 何人 何十人
それでも私は
バナナを食べる
食べても食べても
食べ続ける

うた 神戸詞あしび

103-2016.06.26 大橋愛由等



神戸市青谷にある岸本家の墓

告白とい
うことでも
いのだが、わ
たしは今年
になるまで
墓参りとい
うのをほと
んどしたこ
とがなかつ
た。理由は
くつかある。父がそうした墓参りの習慣を持たなかったり
アリストであったということ、幼少期には姉ともどもきよ
うだいでカトリックのミッションスクールに通っていた家
庭環境だったので、墓参りに直結する先祖崇拜と疎遠であ
ったということ。

そうしたわたしが墓参りを思い立ったのは、父母の遺骨
をカトリック教会西宮市・仁川教会に預けたことや、還暦を
迎えて、父母先祖たちのことを顕彰することで、今の自分の
ありようを確かめたいと思うよ
うになったからである。直接的
には姉から今年が母方の祖父・
岸本邦巳(1891-1984)の三三回忌
であることを知らされ、この機に墓参りをしようと思いい
ったという理由を挙げよう。

岸本の足跡をおつてみよう。生まれは、岡山県上道郡古都
村。明治42年(1909)に神戸に出てきた。戦前は神戸一中現・
神戸高校)の近くで新刊書店を経営。その時社会運動家の賀
川豊彦に兄事して、交流が深かった(わたしの母・光子、その
姉・信子の名付け親は賀川である)。店は日本共産党の細胞の連
絡場所であつたらしく何度か特高のがさ入れを受けてい
る。

社会運動家としては、川崎、三菱の争議(1932)に参加。「日
本農民組合」の創立や、神戸印刷工組合と神戸サラリーマン
ユニオンの組織の結成にもかかわつた。ちなみにこの神戸

海を見ていた午後 神戸を見わたして

ていたようで、それなりに
会へのかかわりを持つて
たひとであつた。古書店と
う仕事はそうした社会運

サラリーマンユニオン組合(SMU)はわが国における最初
の月給取りの労働組合だつたそうで、のちに山本宣治を委
員長とする日本俸給生活者連盟になつた。また日本労働組
合評議会の創立にも奔走。さらに政治研究会を始めて、川上
丈太郎を迎え、労働農民党を結成して、大山郁夫氏の知遇を
えて無産政党運動を展開するが、共産党関係者を弾圧する
三・一五事件(1950)によってこうした社会運動は当局によ
つてきびしく弾圧されることになってしまう。
戦後は元町商店街で古書肆(屋号は「広重書林」「元町書院」を
経営する)かたわら社会運動も引き続き展開していった。祖父
は長生きだつたために、わたしが大学生の時も存命で、文学
や政治のことを語り合つたことが思い出される。
わたしと祖父はちょうど60年の歳の差がある。いわゆる
十千十二支の巡り合わせが同一(乙未)であることで、どこか
性癖も似ているらしく、小銭があれば書籍代に使つてしま
うクセなど、よく母から祖父とセットになつて叱られたも
のである。
祖父は兵庫県古書店組合の設立や同会館の建設にも参画
していたようで、それなりに
会へのかかわりを持つて
たひとであつた。古書店と
う仕事はそうした社会運

動を展開したいひとにはうつつけの職業であるらしく、
決して裕福ではなかつたものの、知的な至福感をもつてい
たのだらう。

その祖父は昭和15年に死んだ私の祖母・静枝とともに歌
人であつた。わたしの手元にくばくかの歌が残っている。
生前に歌集も出版したかったらしいのだが、歌稿どまりだ
つたようだ。わたしも詩と俳句を表現するので、祖父がむ
いだ作品は興味がある。もし歌稿がみつかつたら、この三三
回忌を機縁に孫の手によつて上梓してみたいと思つてい
る。わたしにとつて墓前に捧げる最高の供物にならう。

愛書てふ水脈とうとうと春生きる

愛由等

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.114
神戸

2016年06月26日 通巻114号
発行所/月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人)
maroad66454@gmail.com
定価 600円(税込)